KOYU Times 日本歯科大学校友会
2015 Oct. | no.11

母校はあなたのホームグラウンドであり、校友会・歯学会はあなたのアイデンティティです

校友会会員限定！
母校創立記念式典特別参列制度

校友会主催 ジュビリー5025 開催

ジュビリー 50

ジュビリー 25 東京

ジュビリー 25 新潟

今年度から大学の全面協力のもと、卒後50年（該当学年、54回卒）と卒後25年（該当学年、79回卒）の校友会会員が6月1日の創立記念式典に参列しました。創立記念日を祝賀し、更なる母校の発展を祈念する新たな校友会事業が始まりました。その名も“ジュビリー5025”です。

当日は式典前後に大学図書館の見学会も開催され、午後からは大学主催の記念式典祝賀会（ホテルグランドパレス）が開催されました。両学年合わせて90名もの出席者が、大学教職員との楽しいひと時を過ごし、盛会のうちに名残惜しくも閉会を迎えました。

出席者には、大学からオリジナル記念図書カードが、校友会からは特製バッジ（卒後50年は金色のバッジ、卒後25年は銀色のバッジ、各男性用女性用）が贈られました。

大学と校友会会員はこのように、卒業してもいつまでも「絆」で結ばれています！

当日参加された会員には校友会から特製バッジを贈呈。女性には写真右のクリップタイプも製作

図書カード
（「スポーツ」中原　實）

校友会からのご挨拶
私のふるさと

近藤勝洪 会長

学生諸君にとって「ふるさと」は何処ですか、と聞けば『生まれ故郷です。そこに両親がいます』と答える人が大部分だと思います。

私には、三つのふるさとがあります。

一つはもちろん生まれ故郷です。遠く離れた故郷には今は親戚縁者もほとんどいません。でも忘れられない場所です。

もう一つは結婚して新しい生活をスタートさせた場所でしょう。まだ、学生諸君は無理かもしれません。

そして三番目のふるさとこそが私にとって最も大切なふるさとです。歯科医師を目指して学んだ母校・日本歯科大学です。苦しいときや嬉しいとき、いつも母校は私とともにありました。学生時代の仲間や、指導いただいた多くの先生方一人ひとりを忘れることができません。

ふるさとの訛（なまり）なつかし停車場の
　　人ごみの中に　そを聴きに行く
ふるさとの山にむかいて言うことなし
　　ふるさとの山は　ありがたきかな

いずれも大正時代の歌人・詩人でもあり、わずか26歳の若さで肺結核で亡くなった石川啄木が故郷の岩手県のふるさとを想い詠んだ歌です。

私はこの歌の“ふるさと”を母校・日本歯科大学だと考えてきました。それで何の違和感もありません。日本歯科大学が存在するだけで、安心ですし、他の歯科大学・大学歯学部と違う“らしさ”を感じてきました。

日本歯科大学校友会は、諸君が歯科医師になるために学び、切磋琢磨し、やがてわれわれの仲間になってくれることを信じています。全国の校友が皆さんを支援してくれるはずです。

多くの友と語り合い、厳しい試練に耐えて進む学生諸君にとって、必ず母校が忘れられない“ふるさと”になるでしょう。

第44回浜浦祭

歯ぴねす！

この度、第44回浜浦祭は、6月14日・15日の２日にわたって無事開催することができました。今年のテーマは＜歯ぴねす＞でした。“歯”と“Happiness－幸福－”を掛け合わせた造語です。歯の健康と幸せとの繋がりを連想していただけるようにという、歯学部ならではの思いが込められています。

当日は、多く団体の参加により、屋台の出店や作品展示、対外試合などが行われました。両日とも天候に恵まれ、野外ステージでは、日ごとに異なるイベントを楽しむことができました。地域の方々とも接する機会が多く、普段の学生生活とはまた違った交流もできました。浜浦祭を期に、皆で意見を出し合って企画し、試行錯誤したものが形となる喜びや充実感を、参加した多くの学生が経験できたのではないでしょうか。薄暑の中を、溢れるような一人一人の笑顔がとても爽やかで、印象に残っています。

文末ではございますが、この度ご協力いただいた諸先生方、校友会はじめ地域の皆様、その他、浜浦祭の成功へと尽力していただいた全ての方に厚く御礼申し上げます。

新潟生命歯学部４年
宮野侑子

夏季球技大会が開催されました！

当日は雨の予報も学生さん達の熱き情熱で見事に晴天となり、16チームエントリーの中、校友会チームも参加してキックベース、PK、対抗リレーを行いました。

羽村学部長、南雲学生部長、波多野学生副部長、上野東京短大学生課長も参加されて学生時代の想い出の１ページとなる楽しい一日を過ごしました。

各球技ではそれぞれ３位入賞まで賞金が出るので、各チームは準決勝からは真剣勝負になり、校友会チームはなかなか勝たせてもらえませんでした。来年はお手柔らかに。

平成27年6月20日（土）、東小金井グラウンドにて、夏季球技大会が開催されました。当日は雨も予想されていましたが、天気に恵まれ、無事にすべての競技を行なうことができました。各部活、日頃の部活動で培った体力や団結力を思う存分に発揮し、終始白熱した戦いをみせていました。また、部活、学年を超えて交流を深める場となり、とても充実した球技大会となりました。キックベース優勝はラグビー部、２位バスケットボール部、３位柔道部。PK優勝はスキー部、２位サッカー部、３位野球部。リレー優勝はサッカー部、２位ラグビー部、３位野球部、という結果に終わりました。

また、私は球技大会実行委員長という大役を任せられましたが、普段このような役職につくことがなかったため、球技大会を開催するにあたり、準備の段階から不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、協力してくださった皆様のおかげで無事に球技大会を終えることができました。本当に感謝しております。ありがとうございました。

生命歯学部４年
湯山隆文

我が国初の大学による

歯髄細胞バンク始動！

富士見ホール、九段ホールにて講習会が開催されました。

本年4月に本学は、再生医療の切り札と言われる歯髄幹細胞のポテンシャルの高さに着目した中原 貴教授はじめ本学の研究グループの研究成果に基づき、日本歯科大学校友会会員限定の認定医登録制による歯髄細胞バンクを開設しました。会員数が世界最大と言っても過言ではない本学校友会が行う事の意義は大きいでしょう。（本年7月、8月に開催した認定医講習会では600名以上の校友会会員が認定医に 登録されました）

日常臨床で抜歯した乳歯や智歯などを殺菌洗浄して専用の容器に入れて大学に送ります。そして大学の歯髄細胞バンクで歯髄細胞を培養して保管し、将来の再生医療に利用するもの。

詳しくは、校友会HPの歯科界における諸問題のポイントの「歯科における再生医療」を閲覧するか、大学HPを参照にしてください。

こうゆう先輩 第４回

行政歯科医師という選択

神奈川県保健福祉局
保健医療部健康増進課
副技幹
中條和子（88回）

私の所属名を見て、仕事の内容について想像がつく人はそうは多くないと思います。私のように県庁に勤務し、法律や条例、各種県計画に基づいて、歯科に関する課題の解決に向け、施策化に取り組む歯科医師は、通称、行政歯科医師と呼ばれています。

では、具体的な課題とは何かと言うと、例えば、神奈川県内における窒息による死亡件数は、交通事故死の件数よりも高く、その殆どが65歳以上の高齢者が占めており、食べ物を喉に詰まらせる等、加齢に伴う口腔機能の低下による原因が多いという事実が示されています。

そこで、県ではこの課題に対する施策のひとつとして、高齢者施設や老人クラブ等、高齢者が多く集まる場所で、歯と口の大切さや、口腔機能の維持向上に効果的な顔や舌の体操（健口（けんこう）体操）を伝える県民ボランティア「8020（ハチマルニイマル）運動推進員」を、歯科医師会、市町村、保健所等と連携しながら、地域毎に養成し、その活動支援を行っています。現在その数は900名を超え、年間約45,000人の県民に対して健口体操の普及が行われています。この8020運動推進員の活動が窒息による死亡率の低下にどれだけ影響するか、それを検証することは難しいことですが、ボランティアという県民自身の力を借りて、歯と口の健康づくりに取り組む県民を一人でも多く増やしていくという取組みは、確実に広がっています。このように、課題に即した施策を講じ、展開していくために、資金確保を含めた全体調整を行うことは、県庁で働く行政歯科医師のメインの仕事であり、その手腕が問われる部分かもしれません。

私の出身地でもあり、学生時代を過ごした新潟県は、集団フッ化物洗口の先進県であり、この施策を広く展開し、確実な成果を示している行政という仕事を、私は歯学部生の頃から意識し、大きな魅力を感じていました。そして、歯科医師免許を取得して14年が経過した平成24年１月に神奈川県で歯科医師を募集していることを知り、同年４月に県庁の行政歯科医師となりました。

行政歯科医師となったことは、私にとって、とても自然な選択でしたが、正直に言えば、苦しいことの方が多いかもしれません。ただ、その先には必ず何かしらの嬉しい結果が待っていると信じ、ほんの少しの勇気と、臨床、研究、教育等に携わり培ってきた経験、そして何よりも校友会の先生方の応援と協力が、私が前へと進む原動力になっています。

略歴

平成11年３月	日本歯科大学新潟歯学部（現・新潟生命歯学部）　卒業
平成15年３月	新潟大学大学院医歯学総合研究科う蝕学分野 博士（歯学）課程　修了
平成15年４月	新潟大学医歯学総合病院 歯の診療室医員
平成16年２月	東北大学大学院歯学研究科　口腔生化学分野 助手（現・助教）
平成20年８月～21年７月	ロンドン大学キングスカレッジ歯学部 口腔細菌学分野 客員研究員
平成24年３月	東北大学大学院歯学研究科　退職
平成24年４月	神奈川県保健福祉局保健医療部健康増進課 主査
平成25年４月	神奈川県保健福祉局保健医療部健康増進課 副技幹　現職

KOYU Quiz

Q. 写真の装置を使用することによって期待できる治療効果は何でしょう？

hint
機能的矯正装置の一つです。

広島県日本歯科大学校友会 在校生との懇親会に参加して

平成27年8月15日（土）、広島県日本歯科大学校友会の在校生との親睦会に参加しました。今年の在校生の出席者は生命歯学部の三人でした。会長の西村好一先生のご挨拶では、日本歯科大学の現状や、国家試験などについてお話がありました。今の日本歯科大学のことについて聞けたのはとても良かったです。歓談に入ると、部活の話や試験の話など、先生方が学生だった頃のお話をしていただき、なかなか聞けないようなことも聞くことができ楽しい時間となりました。普段あまり話すことのない同郷の先輩ともお話しする機会があり、硬式テニス部の先輩の話で盛り上がりました。また、県人会の復活のため、在校生と校友会の先生方が協力して準備を進めていくこととなりました。

二次会では、たこ焼き屋さんで唐辛子入りたこ焼きを焼きながら、小松大造先生から破天荒な学生時代のお話をしていただき、信じられないようなことを色々と聞けました。もちろん、広島の歯科界についてのお話もしていただき、参考になりました。今回の親睦会もたくさんの先生方とコミュニケーションをとることができ、有意義な時間を過ごさせていただきました。

広島県出身の学生の皆さん、来年はぜひ先輩や後輩を誘って参加し、みんなで盛り上がりましょう。

生命歯学部2年
椿田一馬

神奈川県人会が開催されました

平成27年6月6日（土）に横浜元町中華街の「カフェラ ポエム」にて神奈川県人会が開催され、今回は在校生8名と県校友会より4名の先生方の参加がありました。

再開後二回目となる今回は初回であった前回と比べ、よりスムーズに開催することができ、また、先生方のご協力のもと、より楽しげな会となりました。今回が私の企画するものとしては最後となりますが今後もこのような会が続いていき、県人の、ひいては日本歯科大学出身者の繋がりのきっかけとなることを願っております。

さて、肝心の次の開催ですが、来年の夏に計画しておりますので、今回来てくださった方は勿論、今回やむを得ず参加できなかったという方もぜひご参加ください。最後に今回の開催に当たり、ご尽力、ご協力いただいた県校友会の先生方、ならびに関係者の方々にこの場をお借りし厚く御礼申し上げます。

生命歯学部 5年
小沼　晃

KOYU Quizの答え：図の装置は上顎前突の症例に用いるⅡ級アクチバトールです。
アクチバトールとは、可撤式矯正装置の一種で、主に夜間に装着する間歇的矯正装置です。
Ⅱ級用アクチバトールでは、下顎を前方へ誘導するような構成咬合位をとります。
その結果、次のような作用を期待することができます。
①下顎遠心咬合の改善（構成咬合位による下顎の成長促進）
②上顎前歯の舌側移動（構成咬合位は不安定な顎位であるため、下顎は後方に戻ろうとする。下顎の歯によって固定された装置が上顎に対して後方（遠心）に移動することにより、唇側線を介して上顎前歯に舌側への力がかかる。）
③大臼歯を挺出させて咬合挙上を行う。（咬合挙上したい場合、臼歯部のレジン床を削合し誘導面を形成する。）

診療室での物語

カルテ No.11

介補の先生に連れて行かれた、初めての在宅診療

生命歯学部
高齢者歯科学
羽村　章
（68回）

昭和59年（1984年）11月、第73回沖縄県巡回歯科診療の一員として沖縄県座間味村を訪れていた。昭和47年（1972年）沖縄県が日本に返還される以前の、昭和36年（1961年）から沖縄県は厚生労働省の協力の基、無歯科医地区への巡回診療を行っており、日本歯科大学生命歯学部も含めて8つの歯学部から定期的に歯科医師を派遣している。無歯科医地区が数カ所に減った現在もこの事業は継続している。

座間味村は、沖縄本島の那覇から西に40Kmほどの所に位置する20余りの島からなる自治体である。約800人が住むのは3つの島であり、最も大きく村役場がある座間味島には約500人、阿嘉島と飛行場のある慶留間島は近接して位置し（今では橋でつながっている）それぞれ300人と100人の人々が暮らしていた。無歯科医村であるので、当然、歯科診療室はないので、座間味港前にある離島振興総合センターの大ホールに、船で運搬してきた歯科器材を自分たちの手で設置し診療室を設けた。

ここで介補・歯科介補を説明したい。第二次世界大戦の沖縄における激しい戦闘により、沖縄県の医師や歯科医師は激減した。そのため占領していた米国は、旧日本軍の衛生兵や医学部や医学校・歯科医学校の中退者などを、医療や歯科医療を担当する助手（医師助手・歯科助手）として従事させ、各地区の病院や保健所、診療所に勤務させた。1951年にはこの助手制度を廃止し、新たに医助手は介補、歯科助手は歯科介補の資格を与えると同時に資格審査と試験が行われて、医療の担い手とした。1972年（昭和47年）の沖縄返還後も、この介補・歯科介補の制度は存続し、特にへき地医療の担い手として活躍していた。介補は一般には医介補と呼ばれることが多いが、正式名称は介補である。一方、歯科介補は正式名称である。当時座間味村にも二人の介補の先生がいらっしゃり、一人は沖縄県立那覇病院座間味診療所の仲里先生、もう一人は同阿嘉診療所の西田先生であった。私達巡回歯科診療班員は、村役場があり診療室のある座間味村に居たので仲里先生と仲良くなった。特に私は仲里先生から住民の健康状態などの情報をいつも仕入れていたので、特に親しくさせていただいた。先生は第二次世界大戦中には陸軍伍長であったが、不発弾で負傷した同僚の治療を手伝い看護した経験があることから、1951年介補制度ができた時に試験を受けて合格し介補になったとのことである。

ある夜、仲里先生が私を呼びに来た。高齢女性の患者さんの熱が下がらないとのことで、一緒に行こうと誘われた。闇夜の中、患家まで歩きながら患者さんの状態について話を聞いた。患者は、私が義歯治療を行った方で、集団自決の生き残りのおばあさんであった。座間味島は沖縄県で最初に米軍が上陸した場所で、その時に喉を包丁で刺したところを、上陸した米軍に助けられ、穴の開いた喉には2重の金属チューブを入れていた。外出時にはスカーフを首に巻きチューブを隠しており、お話しする時には掌でチューブを閉じて息が漏れないようにしていた。二重チューブの内管は取り外しができ、毎日煮沸消毒していたが、外管は気管に留置したままであった。患家を訪れると薄暗い寝室におばあさんは寝ていた。呼吸は苦しそうであるが、意識ははっきりしており、診察に同席することを了解してくれた。布団をめくると、気管チューブの周りは発赤腫脹していて、それは肌蹴させた寝巻の下にある鳩尾あたりまで広がっていた。すぐに自衛隊に依頼しヘリコプターで移送することを勧めた。1時間ほどするとヘリコプターが来て、患者さんは仲里先生の付添いのもと県立那覇病院に移送された。

在宅医療には地域住民の信頼が大事であることを学び、大学に残り多くのことを学びたいと思うきっかけとなった出来事であった。

校友の　歴史の重さ　手渡して　頼むぞ後輩　母校の未来　伝統を　守ってゆきます　我々も　富士見・浜浦　熱き心で

KOYU Times　2015 Oct. | no.11
2015年10月1日発行　発行人：近藤勝洪　編集人：倉治　隆
発行：日本歯科大学校友会　日本歯科大学生命歯学部100周年記念館2F　TEL.03-3261-8971　FAX.03-3264-8745
URL　http://www.koyu-ndu.gr.jp/